

問題行動の多い生徒の事例とその考察

小 片 莊 平^{*}

この事例研究は、問題行動の多い一生徒をとりあげ、その環境と性格を知ることによって問題行動の発生原因をつきとめ得るものとして、そのためにできるだけ多くの資料を集めることを試みた。そこから適切な教育相談が可能になってくると予想したからである。

諸資料の収集には一応成功したものの、その得た結果をもとに行なうはずであった教育相談も筆者が生活指導部の補導係主任であったため「こわい先生」という先入観からレポート作りはうまくいかず成功しなかった。

はじめに

一、二年前県下高校のあちこちで起きた学校紛争のとき、どこの学校でも大多数の生徒が大なり小なり高校生の政治活動の是非に、また学校への要求や学校のとる処置に関心を持っていたようであった。当時HRの時間になると普段目だたぬ生徒でも活発に発言してわれわれを再認識させたものであった。そういうクラスのふんいきの中にあって、これらのことに全く無関心をよそおっている二、三の生徒がいた。F男もその一人であった。彼はいわゆる無気力、無関心、無責任の代表であり、学習意欲はなく常に教師の眼をさけて陰で問題行動を起こしているタイプの生徒であった。集団生活からくる制約をきらって学校からは逃避的となり、クラス担任や親を心配させるような非行に走りがちな生徒であった。F男は来春卒業の予定であるが、学校紛争が下火になってわれわれ生活指導担当の教師もようやくひとりの生徒にスポットをあてて指導する余裕ができてきた今、当時から強い関心を持って眺めてきたグループの代表であるF男について、今でもときどき問題を起こしている彼のどこにそのような要因がひそんでいるのか、非行化への逃避、学習不適応の原因等彼の人格形成にこれらの諸要因が働く相互関係を分析して正しい人格形成がなされるように力を貸すためにその環境と性格を知ろうとするのが研究の目的である。

I 事例の概要

1 対象 F男 高校3年生 1.8才 排球部員 身長180cm 体重85Kg

2 問題行動の概要

- (1) 1年生2学期アルバイトで知り合った有職少年と喫茶店で喫煙中婦人警官にみづかり補導された。
- (2) 2年生1学期欠席して新潟へ遊びに行ったところ偶然街で本校教師にみづかった。家では学校へ行ったものと思っていた。制服は友達の家で着替えていた。
- (3) 同3学期3年生が部室で喫煙していたことがあった。F男もその部屋にいたので喫煙したのではな

いかと思われたが、本人は否定した。しかし疑いは残った。

(4) 3年生1学期学校を休んで他校の生徒数名を加えて、ある高校へけんかの「すけっと」と称して出かけたことがあった。暴力ざたにはならなかったが喫煙していた。

3 本人の現況

(1) 性格 お人好しでのんびりしているところがある。気が強そうに見えるけれども、実際には弱く人のおだてやおどかしに乗りやすい。体格がずばぬけてよく、腕力があるために悪い仲間によく利用される。学習には全く興味がなく、したがって教室内ではほとんど存在を認められない。不勉強や素行について注意されると深く反省したように見えるが、少しも長つづきがしない。服装はどこかにならず特徴があり、それがしまりのない性格を表わしているようだ。

(2) 学業成績 1学年 10科目のうち地理、体育、美術の三科目が評定3他教科は2、クラス最下位、
2学年 15科目中倫社、体育、文書実務、美術の4科目が3他は2、クラス最下位

3学年1学期 平均点 42 最下位

(3) 健康状態 健康にめぐまれてはいるが、血圧がやや高い、出欠の状況 第1学年 欠席 17日
早退 18回 第2学年 欠席 24日 早退 7回 第3学年1学期 欠席 9日 早退 4回

4 生育歴と友人環境

正常分娩、母乳、高校2年まで病気をせずに健康に育ってきたが胃痛と称して欠席することがよくあるようになった。体格は抜群で排球、籠球が得意である。現在排球部員である。中学時代排球の選手であったため他校にも部を通じての友人がある。問題行動の多い生徒と特に親しいようである。腕力を買われて仲間の間では相当はばをきかせてはいるが、問題行動の発端はどちらかというとの生徒に利用されて起こす場合が多いように見受けられる。

5 家庭環境と家族構成

(1) 家庭環境

家族構成は実父母、本人、妹、祖母の5人である。祖母はまだ若く(62才)働き者で家の中心的存在である。性格も強く父も母もすべてひかえめであるようだ。孫をたいへん可愛いがりとくにF男には目がないように思われる。祖母はF男の父が小学校の生徒であった頃、毎日学校まで送っていたというほどで、その溺愛ぶりが近所の人々のうわさになったそうである。現在万事に甘く育てられたせいかわ父はお人好しで定見がなく子供のしつけにもきびしさは全くみられず放任的である。母は父の放任と祖母の溺愛ぶりを苦にして心配してはいるものの、祖母の干渉やF男の反抗を気にして放任同様にまかせておくようである。

(2) 家族構成

実父 39才 農業とプラスチック加工業 高等小学卒 健康、仕事に熱心であるが教育には関心がない。

実母 40才 同上

同上

同上、教育に関心あり、PTAには出席する。

本人 18才 高校生

妹 15才 中学生

祖母 62才 農業 尋常小学卒 健康 家の仕事を手伝っている。F男が家族の中で最も慕っている。

6 マルチ（生徒理解のための多面調査）の結果

第1傾向（ゆきづまって、自分で苦しまおそれのある傾向） 4（境界帯）

(1) 自己違和感 4（やや強い）

(2) 不安感 4（やや強い）

(3) 自己否定感 5（ふつう）

第2傾向（自分のまわりに問題を感じ、それに負けて後退してゆくおそれのある傾向） 2（強い）

(1) 家庭不適応感 5（ふつう）

(2) 学校不適応感 4（やや強い）

(3) クラス不適応感 5（ふつう）

(4) 先生不適応感 5（ふつう）

(5) 抵抗力（感じた問題に負けないで、取組んでゆく力） 2（弱い）

第3傾向（学習不足の傾向） 3（やや不足している）

成績の程度 2（能力を出していない）

勉強の程度 5（ふつう）

知能 2 成績 1

(1) 成績に対する関心 7（ふつう以上にある）

(2) 学習に対する意欲 6（ふつう）

(3) 学習に対する自信 3（ややない）

(4) 学校における学習態度 4（ややふじゅうぶん）

(5) 家庭における学習態度 5（ふつう）

(6) 家庭の関心 5（ふつう）

(7) 健康と悩み

イ 体の状態が悪くて勉強に打ちこめないときが（ときどきある）

ロ 悩みごとのために勉強に身のはいらないことが（ときどきある）

II 問題行動の原因

孫を盲愛するだけで教育的配慮に欠けている祖母が家庭生活の実権を握っているという特異な生活環境にあり、父母もまたこれを認めている傾向がある。教育やしつけについては母親は多少関心もあり、F男をしっかりとすることもあるが、父親はいつも祖母に気づかってか無関心を装っているらしい。そのため、母親には反抗的になり、都合が悪くなると祖母のもとに逃げこみ、母の注意に従うというようなことはない。問題行動の多い生徒となったのも、このような自制心の育たないわがママを許している

環境から生れてきたのではなかろうか。マルチの結果に表われた特徴として、第1傾向が境界帯にあること、第2傾向が強いことが、その可能性を表わしているようである。

Ⅲ 指導方針

1 家庭環境と友人関係

(1) 問題行動のあるたびごとに父なり母なりにあって話し合ってきており、またクラス担任からも家庭の事情をきいていたので、問題行動の第一の原因は祖母の盲愛と父の無関心によって起こっていると思われるので祖母を含めて家庭教育の欠陥を是正し、父が家庭の中心になって、F男の教育に熱心になるように家族で努力する必要があるのではないかと思う。そのためには家庭との連絡を密接にしてたえず家庭の状況を知っておくことが必要となる。

(2) 仲のよい遊び友達はたしてF男の立ち直りに役立っているのかどうかを認識させ、遊ぶだけの仲間であればそれは真の友人ではないと考えるようになるように指導する必要がある。

2 マルチの結果をもとにして

第1傾向（ゆきづまって自分で苦しむおそれのある傾向）が4を示し境界帯にあるということは、深く真剣にものを考えるときもあり、これを契機に飛躍する可能性のあることを示している。(1)の自己違和感4は考えたこと、あるいはその結果の行動が自分の気持ちとくい違っている感じがやや強いことを示したもので、あるべきはずの自分と現実の自分とのくい違いから、自分自身がほんとうの自分でないような感じをやや強く持っていることを表わしている。F男の自己違和感4は自分の行動に対して反省の表われであり、前進的にものを考えようとする態度の表われともみられるからむしろ好ましい傾向といえよう。だが不安感が4を指していることは、自分の進んでいこうと思っている方向に障壁があるかまたありはしないかということの意味している。不安感4はだれにもあり、それ自身困ったことではないが、立ち直ろうとする意志に絶望感を持たせないようにはげましてやる必要がある。自己否定感が5であることは、自己違和感、不安感がやや強くても自分の行為を反省し、立ち直ろうとする気持ちを否定するものではなく、自分をとり返そうとしていることの表われであり、(1)(2)が4であっても健全さは失なわれていないと思う。

問題と思われるのは第2傾向（自分のまわりに問題を感じ、それに負けて後退してゆくおそれのある傾向）にある。指数2（強）が示しているごとく自分のまわりに問題を感じることは何らさしつかえなくかえって進歩につながるわけであるが、その問題にふり廻わされたりして非行とか怠学の方に後退してゆく傾向がある。F男の場合その傾向が特に強かったわけである。いわゆる問題を持っている生徒に共通の特徴といえよう。

家庭不適応感、クラス不適応感、先生不適応感が5、学校不適応感4であることは容易にうなずける。学校へ行くのがあまり楽しくない。学校なんてなければよいと思うことがときどきある。怠学したいとほんとうに思うときがある。と答えているが、この生徒に学校を楽しい場所に変えることはちょっと不

可能であろう。しかしクラス、先生に対して気持ちよくいられる感じをもっているということは、自分の気持ちをだれかが理解してくれているものと思ってもよいだろう。F男の気持ちに虚心に耳をかたむける姿勢を持って話しかければ素直に応じてくれるかもしれぬ。その機会をくり返し持つことが必要である。

さらに第2傾向において、抵抗力（感じた問題に負けないで、取組んでゆく力）が2で弱いことを示しているが、これは学校不適応がやや強いことからそこに問題のあることを示しているのではなかろうか。問題と真剣に取り組んでいく力が弱いためにややもすると後退していくおそれのあることを示しているのではなかろうか。F男の日常行動から抵抗力が特に弱いと感じてはいた。

第3傾向（学習不足の傾向）が3を示しているのは、なんとしても勉強の不足が原因と思われる。成績に対する関心はふつう以上にあるのだが、また学習に対する意欲もふつうなのだが、学習に対する自信はない。これは勉強してもわからないということであろう。わからなくなった原因はいろいろあるだろうが、今必要なのは成績が悪いにもかかわらず成績に対する関心が非常に高いことに着目する必要がある。とくに成績をもっと上げたいと強く思っているが、現実には気持ちとは逆に、かなり下がってきている。と答えているのは勉強に対してこれではならないという前むきの姿勢の現われとみてよいだろう。

IV 指導経過の概要

3年生になって6月第1回目の面接相談をおこなう。他校の生徒を加えてけんかの助力に行った直後であり、生活指導係りとしてF男から事情をきいた教師のひとりであることはとにもよる意識している。話は当然そのことから始まった。F男はなにかしかられはしないかという気持ちが強く、警戒心と不安感を取り除くように務めたが結果はそらぞらしいものだけが残った。私の気持ちの中には絶えず補導係という分掌上の役割が重くのしかかり、それがF男との対話を阻害していたことは確かであった。大きな体から冷汗を流しながら話の受け答えをしているのを見るとこっけいでもあったし、気の毒にも思われた。F男が自から相談を持ちかけてきたのでないのであるからそれは当然のことであり、レポートづくりはうまくいくわけはなかった。第1回目はこのようにしてわずかの時間話し合った程度で終わった。

6月第2回目を行なう。前回また話し合いをすることにしてあったために、今度はしかられるという不安だけはなかったようだ。秘密は絶対に守ること、ここで話したためにそれが自分にとって不利には絶対にならぬこと、補導係としてみないで相談員としてみて欲しいということは多少理解してくれたようであった。しかし相変わらず閉鎖的で主客転倒している感があり心の通った話し合いのふんい気はなかなか出そうにもなかった。

7月夏休み前に第3回目を行なった。話題は夏休みが中心であった。学習のことにふれると宿題が多すぎると不満をもらしていた。アルバイトをする予定でいたが、5月に体の調子が悪いので医者に行ったら軽い腎臓炎だといわれたのでやめて、どこにも出ず家にいるのだといていた。今回は前回にみられたときよりも幾分抵抗感はいすれ受容の傾向がみられるようになった。成績不良のことが一番気になるらしく落第しないだろうかと苦しんでいるようであった。今回は前回の堅苦しさに比べて、ずっと打

ちとけた気持ちで互いに接することができ面接による指導へ一歩近づくことができた。

9月第4回目の面接を行なう。F男は依頼心が強く、まわりの問題に対しては、それに負けて後退し問題行動に走り易いのであるということを自覚していた。自分の欠点は想像していた以上によく知っているのであった。現在交際している数名の生徒から徐々に遠ざかろうとしていると話した。第1回目から比べればレポートは確かによくなったようだ。そして話したい事柄はよく話すようになった。「努力してよい生徒になりたい。成績も向上させ、親に迷惑をかけたくない」という健康な生徒であることは理解できた。

おわりに

ひとりの問題生徒を選んで教育相談を試みようとするのがいかに作為的であり、むずかしいものであるかということが今回のF男のケースでじゅうぶんに認識できた。F男の環境と性格の基礎調査は教育相談のためには欠くことのできない資料であるが、しかしそれは教育相談がより効果的であるための一手段にしかすぎない。クライアントとの間にレポートが生れてこなければいかに精密な資料でも価値はない。ふだん、壇上で全校生徒を前にして彼等にとっては一番耳ざわりなことをいっている私を、また問題を起こしたとき一番こわい人に見える私が教育相談を試みようとしても生徒が不安と警戒心を持って臨むのは当然のことであった。F男が最後まで拒否反応を示したのはいい例であった。私がこの分掌上の役でなかったならあるいは成功していたかも知れない。こう思うとき生徒からきらわれる役にあるものは教育相談はほとんど不可能といってよい。たとえ自分のHRの生徒であっても同じであろう。研修会に参加している間常に抱いていた不安であったがやはりそれはほんとうのものであった。教育相談は生徒が自分から進んで相談にくるところに最も効果を発揮するのではなかろうか。